

コロシアイ学園生活が始まって数週間。皆少しずつ信頼して協力できるようになった頃、僕部屋に手紙が置かれていた。

差出人は霧切さん…？  
「夜に一人で私の部屋に来て。誰にも見られないように」  
…という意図なんだろう…

まあでも霧切さんの事だ。なにか黒幕への手がかりでも掴んだに違いない…!!

夜時間…

何とか誰にも見られず来れた…

よし…

……え

扉に近づいた時、うっすらと霧切さんの声が聞こえてきた…確かに霧切さんの…だけど明らかに様子がおかしい…

誰かと会話しているわけでもなさそうだ…

気のせい…僕が何かの音と勘違いしているんだと思った。

カキカキ…

…だけど何故か…  
すごく…  
嫌な予感がした…

勘違いと分かっているにしても脳裏に変な憶測がよぎってしまったから。

何か打ち付けるような音に合わせて、浮ついたような彼女の高い声が漏れ出ている

大丈夫…  
大丈夫…

落ち着いて…  
確認しないと…

キィ

霧切さん

そこには…僕の想像より遥かに衝撃的な光景があった。強烈な不快感と同時に動悸が激しくなる…絶望…?

見知らぬ男が裸で霧切さんの身体に乗りかかり、首に手を回し、動いている…。

霧切さんはそれに抗う様子はなく、僕が現れたことに戸惑っているようだった。



え…？

な、苗木君…？  
どうして…？

そして男は



あ…

そんな霧切さんの意識を戻すように、彼女の顔を寄せ唇に舌を入れた…。

…もう自分自身がどんな感情でいるかも分からなかった…。僕にできたことは

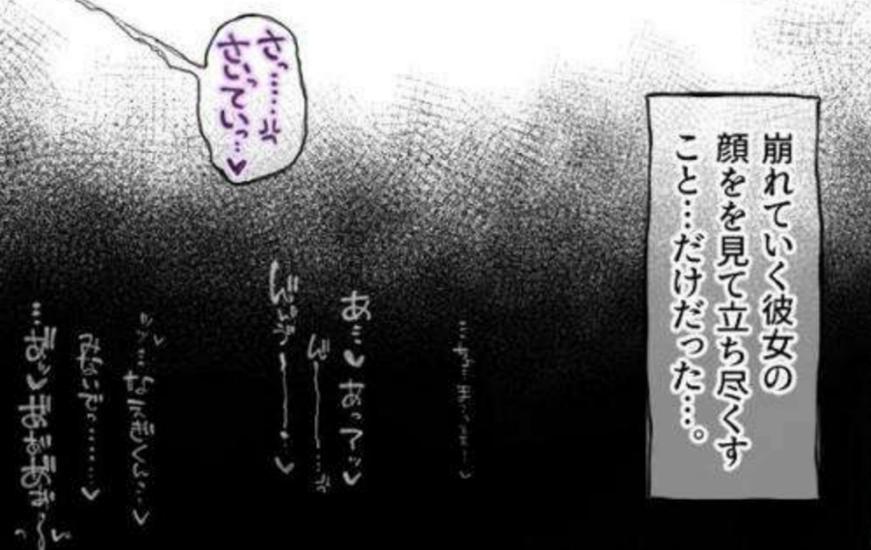
あ…



ハッ。俺が呼んだんだよ

崩れていく彼女の顔を見て立ち尽くすこと…だけだった…。

あ…



あ…  
あ…  
あ…



あの霧切さんが、まるで  
身体を玩具みたいに  
弄ばれている…

僕なんか気にもかけて  
ない…。きつと頭の中は  
快楽のことしか考えられて  
ないんだろう…。

身体は常に痙攣を起こして  
乱暴に掴まれた顔は、見た  
事ないほど恍惚としていた。

時折僕の事を気にして  
抵抗する素振りや声を  
出していたけど…

それを黙らせるように  
男の身体の動きは激しく  
打ち付けるようになって…

一瞬で、あっけなく  
霧切さんは快楽の  
泥沼に引きずり  
込まれていった…。



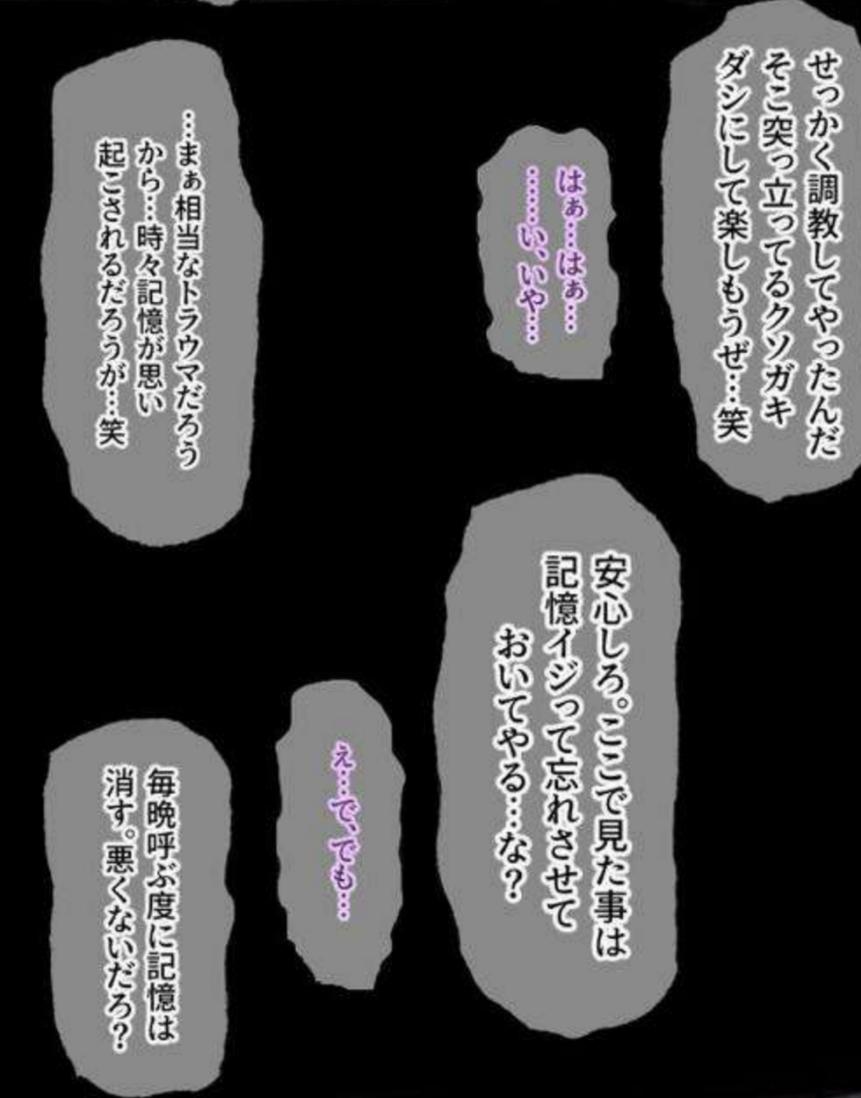


なあ響子...  
もう素直になれ。



いつの間にか彼女の  
嬌声は止み、部屋は  
人間の生々しい臭いで  
満たされていた。

そして男は、霧切さんに  
覆いかぶさりながら  
耳元で何か囁きだした。



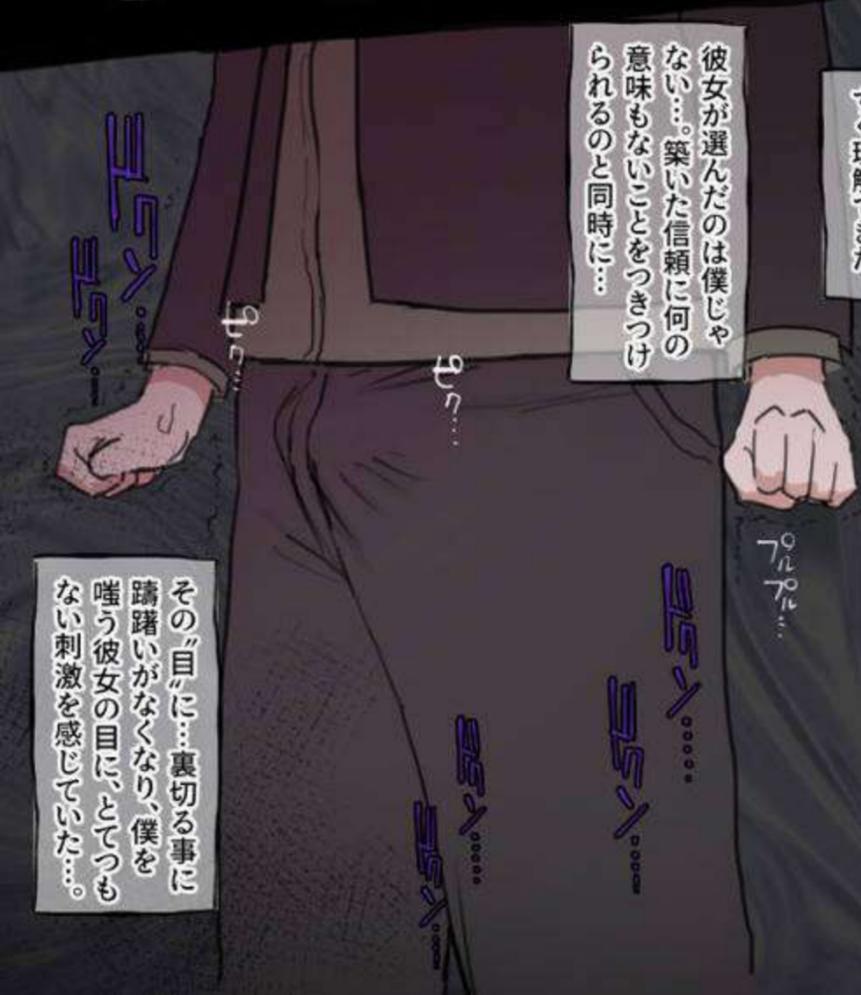
せっかく調教してやったんだ  
そこ突っ立ってるクソガキ  
ダシにして楽しもうぜ...笑

はあ...はあ...  
びんや...

安心しろ。ここで見た事は  
記憶イジって忘れさせて  
おいてやる...な??

え...でも...

毎晩呼ぶ度に記憶は  
消す。悪くないだろ?



彼女が選んだのは僕じゃ  
ない...築いた信頼に何の  
意味もないことをつきつけ  
られるのと同時に...

聞こえずとも  
すぐ理解できた。

その目に...裏切る事に  
躊躇いがなくなり、僕を  
嗤う彼女の目に、とてつも  
ない刺激を感じていた...



.....?  
霧切さん...?

でも...  
そんな...  
ひどい事...

!!

にやま...

